

「黒い雨」関連の山田レポートについて

山田広明氏は ABCC の研究員ではなく事務職員であり、線量推定計算へ遮蔽調査結果を活用する方法についての打ち合わせと研修のためオークリッジ研究所に長期出張した際に書かれたレポートではないかと思われる。従って、これはオークリッジ研究所から出された報告書であり、ABCC で事前に審査を受け承認された正式な研究計画に基づいて作成された学術報告書ではない。データは、急性症状が記録された ABCC の基本調査票の磁気テープと、初期の遮蔽調査票のマイクロフィルムから抽出されたと推定される。

山田氏が分析対象とした黒い雨体験者群は広島県の 236 人で、対照群は黒い雨が降っていなかったと思われる広島市南東部から 16,045 人を選んでいる。両群とも被爆距離が 1,600 m 以上としているが、1,600 m 付近においては、放射性降下物のみならず、原爆からの直接被曝が無視できない線量としてあると思われる。これらの急性症状が黒い雨単独の影響であると断定し得るものではない（そのことは、山田氏自身がレポートの中で、直接被曝による影響との区別をしていないと述べている）。また、集団の設定や、下痢、嘔吐、脱毛などの急性症状をまとめたデータの取り扱いについては不明な点が多く、例えば、このレポートで脱毛が slight となっている区分には「脱毛なし」が相当数混在している可能性がある。

放影研に黒い雨のデータソースとしてあるのは MSQ (Master Sample Questionnaire) と SH (Shielding History) のみである。MSQ は 1950 年の国勢調査時に行われた附帯調査を基に 1950 年代に調査されたもので、これに基づいて約 12 万人の寿命調査 (LSS) 集団が設定された。MSQ には、黒い雨に関する質問が含まれている。放影研ではここ数年、被曝線量推定の誤差を最小限にする取り組みを続けており、手元にあるデータをすべて再度精査することとした。この過程で、当初入力されていなかった MSQ のデータを 2003 年頃から少しずつコンピュータにインプットし始め、この作業の中で、対照群を含む LSS 対象者 120,321 人の MSQ の中に、黒い雨に遭ったと答えている人が約 13,000 人いることが分かった。

MSQ のデータ入力は最近終わったところで、内容についてはまだ点検が終わっていない（事務レベルでデータ整理をしている段階である）。従って、現在のところ、これを使った解析計画は立てておらず、研究対象にするかどうか未定である。約 13,000 人のデータについて、新たな研究計画 (RP) を立ち上げることができるのか、何らかの科学的な解析ができるのかをこれから検討する。今後の方針が決まれば報告する。もし、これ以上解析をしないということになれば、その旨お知らせする。